



村上 文也さん
Murakami Fumiya

〔上田口区〕

むらかみ・ふみや / アユ釣り愛好家が集まる「緑川友釣りクラブ」に所属。仕事のかたわら、仲間とともにアユ釣りを楽しんでいる。

おとりを使った「友釣り」で 楽しむアユとの駆け引き

「幼いころから親しんでいた川で、アユでも釣ってみようかと何気なく始めたのがきっかけ。それ以来、すっかり病みつきになってしまった」と語るのは、アユ釣り名人の村上文也さん。

現在57歳になる村上さんは、「緑川友釣りクラブ」（赤星良一会長）に所属し、アユ釣りの歴はおよそ35年。村上さんが夢中になるアユ釣りの魅力は、「友釣り」と呼ばれるおとりを使った独特の釣り方にある

という。「おとりのアユを次々と替えていく『循環の釣り』と、アユとの駆け引きが面白い」と目を輝かせる。アユは、稚魚期を海や河口域で過ごした後、4月から5月ごろに川を遡上（そじょう）する。その後、秋には産卵のために川を下る。産卵期に入るまでの脂が乗った「若アユ」を狙って「6月1日の解禁日から、9月いっぱいまで

の間に、50回くらい釣りに行く」と村上さん。

「子どものころから緑川で八工を釣っていましたから、それも合わせる釣りは50年以上ですね」と語るベテランは上手に釣ることについて「おとりをよく泳がせること。あとは、長年の経験と勘がものをいいます」とこぼす。

村上さんはアユを求めて、球磨川や五ヶ瀬川など、県内外のさまざまな川も巡っている。「アユは、清流に生息する魚。しかし、ここ数年はこの川も水質が悪くなってきたっており、昔ほど釣れない。緑川も、その傾向が見られます」と残念そうに話す。また「最近ではアユ釣りの愛好家が増えているが、マナーを守らない人も多い」と苦言。「特に、甲佐町はアユの町ですから」と、清流・緑川の今後に危機感を抱く。

この日撮影で訪れた緑川では、早速川面を見つめてアユを探すが、村上さん。アユ生息の痕跡がわずかに見られたとき、真っ黒に日焼けした顔がほころび、瞳が輝いた。